HamaMed-Repository
浜松医科大学学術機関リポジトリ
浜松医科大学
Hamamatsu University School of Medicine

Corrective long spinal fusion to the ilium for patients with adult spinal deformity results in good physical function after mid- to long-term postoperative follow-up

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2025-05-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 澤田, 将宏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/0002000403

論文審査の結果の要旨

高齢化社会に伴い、成人脊柱変形（ASD）と診断される患者が増加し、日常生活や身体機能に大きな影響を及ぼしている。最適な矢状面アライメントと運動中の矢状面バランスの改善が、脊椎矯正固定術において重要であると報告されているが、術後の中長期的な転帰を検討した研究は不足している。本研究は、ASD 患者に対して行われた腸骨までの脊椎矯正固定術が術後 5 年以上にわたる歩行能力、身体機能、および生活の質（QOL）に及ぼす中長期的な効果を評価することを目的とした。

本研究は浜松医科大学臨床研究倫理委員会の承認を得て実施され（承認番号: 21-190）、2013 年 8 月から 2014 年 9 月にかけて腸骨までの脊椎矯正固定術を受けた 47 例の ASD 患者のうち、術後 5 年以上の経過観察が可能な 21 例を対象に解析を行った。身体機能は 6 分間歩行距離（6MWD）、股関節屈曲筋力、膝伸展筋力、10 メートル歩行テスト、Time up and go test（TUG）で評価され、QOL は患者報告アウトカム（PRO）スコアとして、Scoliosis Research Society-22 と Oswestry Disability Index を用いて評価した。解析の結果、6MWD は術前に比べて術後有意に改善し（術前: 341.7±123.9 m、術後 5 年以上: 430.0±111.2 m）、腰背部痛の軽減も確認された。股関節屈曲筋力は術後 5 年以上で有意な低下が見られたものの、年齢による QOL の改善の違いは観察されず、後期高齢者でも PRO スコアが術後 5 年以上にわたり維持されていた。これらの結果から、腸骨までの脊椎矯正固定術は中長期的に歩行能力および QOL の改善に寄与し、高齢患者においても適切な術後リハビリテーションが重要であることが示された。

本研究は、ASD 患者の術前から術後 5 年以上にわたる身体機能および PRO の改善を詳細に検討した点を、審査委員会では高く評価した。

以上により、本論文は博士（医学）の学位の授与にふさわしい内容であると全員一致で評価した。

論文審査担当者　　主査　黒住　和彦
　　副査　尾島　俊之　　副査　中島　芳樹